

第2回 まちなか公共空間における「芝生の造成・管理」に関する懇談会
議事概要

日時:2019年8月16日(金)15:30~17:40

場所:丸の内二重橋ビル6階 DMO 東京丸の内

事務局より、資料に基づき第1回懇談会の振り返り及び第2回のテーマの説明がなされ、その後、ゲスト委員からの発表と、出席者間における意見交換が、以下のようになされた。

[丸の内仲通り「芝生のチカラ」の効果と展開]

- 丸の内仲通りを、居心地よく歩きたくなる空間とするために、今年5月に「MARUNOUCHI STREET PARK」というイベントを行った。普段は車道の空間に、5日間100時間にわたって幅7m、長さ100mの芝生を設置し、都会のピクニック空間を創出した。
- 道路上が一夜にして芝生空間となった意外性が、人を惹きつけ、沢山の人が滞留する空間となった。また、設置したストリートピアノの情報がSNSで拡散され、音楽仲間が他の楽器を持ち寄り偶発的に仲間が集まる空間となった。路面の飲食店では、売り上げが5割アップになる等の効果があった。芝という緑の空間のチカラと考えている。
- 2020年の夏には、丸の内に芝生を使ったクールスポットを出現させるべく、現在、芝生の種類や保水マット等を組み合わせ、筑波大学や国交省の調査の協力を得ながら、仮設の芝生広場の実証実験を実施中。今回の実験結果を踏まえて、今後、仮設の芝生広場による酷暑対策の技術開発に繋げたい。

[まちなか芝生導入にあたっての技術]

- 日本における芝生の技術開発の動向を振り返ると、1970年代のゴルフ場開発、1990年代のサッカー・ラグビー場等の整備、2000年代の校庭の芝生化の推進と発展してきた経緯があり、それぞれの施設では、芝生の利用者数や管理形態の違いがある。
- 競技場の芝生の耐用時間としては年間800時間を超えると、密度低下や擦り切れが目立ち始めるという研究がある。
- 芝生消失の原因としては、土壌基盤よりも利用時間によるファクターが大きく、使う場所をいかに集中させないか、が重要。
- まちなか芝生として、日照時間の確保、芝生の利用目的の明確化、補修を前提とした設備、利用を集中させないような動線・利用の制御等が必要。
- また、芝生を継続的に管理するポイントとして、臨機応変な対応と楽しく管理していくというところが重要と考えている。

[芝生広場の維持管理]

- 京都市の梅小路公園は、都市の真ん中に、運動施設を設けずに、森と芝生広場を中心とした公園として平成7年にオープン。隣接して水族館があり、鉄道博物館が立地。
- 芝生の管理ではエアレーションと目土に留意し、水はやらず、除草もしない管理を行っている。都市緑化フェア後の1995年に芝生広場を全面ノシバにしたが、その後生育の強いティフトンに覆われ、ノシバは見られない状態。エアレーションは7年前から行っている。
- 梅小路公園の冬の魅力を上げたいという趣旨で、3年前より地域からの資金協力を得て、冬芝を導入している。
- サッチ(刈芝)を取り除かない時期があったが、不透水層となっていた。スーパードで除去することが重要。
- 夏芝のティフトンの生育期間よりも、冬芝の方の生育期間が長い。夏芝のティフトンに頑張ってもらうためにも、冬芝を育てることが芝地の生育環境の改善に繋がる。

[質疑応答]

- セントオーガスチンとティフトンについて、どちらの種を利用していくのが望ましいと考えるか。
⇒ 京都市の岡崎公園ではセントオーガスチンを4、5年前に植えた。見た目がきれいなのは良いが、人が通る箇所では剥げた。そういう場所はティフトンが良い。適材適所である。
- 丸の内仲通りの芝生の下マットは、クッション材としても理にかなうので、ぜひマットを検討されてはどうか。
⇒ 最初は高さ調整のためであったが、効果が分かったので、今後活用していきたい。
- この懇談会では、はじめてでも使えるマニュアル作成を目指すのが、地域性の違い、場の特性、部分的に種類を変えるなど、現場主義で今までのマニュアルや文献ではわからないことを示せたら良いと感じた。
地域資材の活用例として例えば鹿児島では、市電の軌道敷の緑化で基盤材に透水性、吸水性に優れたシラスを活用している。
サッチ(刈芝)について、梅小路ではスーパードを使っているが、刈る回数が年に3回だからそうやっているのか。あるいはロボット芝刈り機などで刈る頻度を上げれば、不要となるか。
⇒ 梅小路では年3、4回の芝刈りで刈草が10cmにもなるため、必ずスーパードを使っている。毎日刈るような芝は、また別の話かと思う。
⇒ 校庭の芝生では、週に3、4回刈っているところは刈りっぱなしであり、その辺りの頻度が限界ではないか。それより少ない頻度では見た目が悪くなる。

- 養生期間について どれくらい取っているのか？ また、芝張りを市民ワークショップでやるときに、子ども達を含めみんなでもやることもあるが、一部はプロに任せるべきか、現実的にどうなのか。
 - ⇒ 校庭の芝生は子どもたちと密接な場所であり、少しだけでも子どもに関わってもらっている。張芝をならべるだけで、授業の一環としてもやっており、特に問題はない。ビッグロール芝などはプロの施工が必要。

- 梅小路公園の芝生広場は広いが、どういう管理がされているか。ティフトンと冬芝のコラボなど、施工、維持管理費用がかかる中で、どうやって賄っているのか。
 - ⇒ 冬芝導入には、初年度の 2016 年に「京都梅小路みんながつながるプロジェクト」から全積分の全額補助 800 万円をいただいて施工できた。その後は、「冬芝の会」を設立し京都市の京都駅西部エリアの補助金や協賛金を受け入れ、300 万円程度／年を要しているが、指定管理の受託料からは充当できていない。芝生広場のシンパを募って冬芝の継続に努めている。

- 道路空間の暫定的な公園的な利用、と公園の芝生の話と示唆に富む発表であったが、仮設の実験の芝生はある意味消耗品であるが、最長どの程度使うのか、使った後の芝生をどうされるのか
 - ⇒ 前回のイベント後、一部の芝については、欲しい方にお渡しした。今回、枯れたものについては廃棄せざるを得ないが、状態の良いものは出来るだけ多くキャンプ場に移設する予定である。入れ替えの時期は、1週間から2週間程度と認識したものの、今後管理ノウハウを重ね、より長持ちするように工夫したい。また今回、途中でコウライシバを入れ替えたが、産地による見た目や、芝の長さ、根の密集具合などの違いもあったため、その点も留意して入れ替えを行う必要がある。

- 梅小路公園では、芝刈り、散水など あまり労力をかけずにやっているお話しだが、本来コスト、手間がかかるもの。もっと多く芝刈りをしていた時期もあったのでは？
 - ⇒ 指定管理料として維持管理のトータル額が決まっており、実際には芝刈りは年3回分しかいただけていない。
京都の気候では冬芝はあまり伸びない。夏芝は、できれば、5回、6回刈れると良い。

- 暫定利用に関する見解、現場を施工・管理したゲストスピーカーのアドバイスを伺いたい。
 - ⇒ これまで、甲子園球場でのサッカーの試合等、スポーツのための芝生としての暫定の利用の経験はある。(土壌が)薄い中で水をどう管理するのかは永遠の課題であり、チャレンジをフィードバック頂ければ、と思う。

- 仮設の芝生も「いきもの」として使用後に無駄にしないことを考えないといけないのでは。また、校庭の芝生で利用を集中させないとの発表があったが、まちなかの芝生では逆に利用をうまく集中させて被害を広げない工夫も考えていくべき。

前回、芝生か原っぱとするかの議論があったが、梅小路公園で芝生が維持されているのは、品種なのか利用の頻度なのか何がポイントと考えられるのか、また、京都の気候など地域性によることもあるのか？

- ⇒ お金があればもっと除草も人力でできるが、雑草もある程度は許容しており、特にスズメノカタビラは芝生とみて頂ける。冬芝にはお金がかかるが、最低限皆に愛される芝生とするよう取り組んでいきたいと考えている。

- ウォークアブルな空間をつくるためにどうしたらよいか。なぜウォークアブル、イコール芝生という発想となるのか。ウィーンではスマートシティウィーンという旗のマークがあり、リソース（歴史的資産、都市の存在価値）、エネルギーと環境、人間らしい安全性と健康、その3つがスマートシティによって実現するとしていた。今回の丸の内仲通りの発表で売り上げの話があったが、我々の購買意欲、勤労意欲をかきたてるのに、緑・グリーンインフラが有効ということが断片として示された。

ビルのカーペットは、かつては全面絨毯であったが、消耗する部分のみ張り替えられるよう効率化を図っているケースもあり、芝生についても既成の芝生の技術ではない、もう一歩先の突き抜けた技術が必要ではないか、との印象であった。例えば、アスファルトやコンクリートを壊して改めて芝生広場にするには大変費用がかかるが、例えば、都市大方式ハイブリッド芝であれば対応できると考えている。

アメリカでは、ランドスケープターフと、スポーツターフの2種があり、前者は品質にはこだわらないが、スポーツターフではそうではない。まちなかの芝生は、この中間としてのカテゴリーとなるのではないか。このあたりを新しい技術として、深めていくべき。

なぜヨーロッパが人間中心のまちとしてウォークアブルを進めているのか。都市での生産というのは物ではなく、知的価値を高めるクリエイティブな生産であり、その知的価値を高めるためには、ストレスを除くことが重要である。そのためには、無機化・デジタル化する中で、アナログな人間であることを心理的・生理的にも確認できるようにすることに大きな価値があり、そのためには自然的要素をどう入れていくか、そこにチャレンジしていくことに意味がある。

今日頂いた議論をまとめ、次の課題に引き継いで頂きたい。

以上